

甘い夢、少し甘い現実

ヒカリゴケ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少し眠ってしまったバルクホルン。目が覚めるとそこには……

目次

甘い夢、少し甘い現実

—
1

甘い夢、少し甘い現実

「……ねえちゃん。……きて」

微睡みの中、声が聞こえた。

「……起きて。……お姉ちゃん」

誰かに呼ばれている。

その声に誘われるように目を開ける。

「あつ、おねえちゃん、起きた？」

すると目の前には。

「ああ。おはよう。クリスマス」

最愛の妹、クリスマスがいた。うむ、今日も可愛らしいな。

「おはよう。つて言ってもまだ夕方だけどね」

「ん？ そうか」

「うん、お姉ちゃんお昼のあとすぐに寝ちゃったから」

「そう、だったか？」

寝る前が少しあやふやだな。

「少し疲れていたのかもしいないな。すまないクリスマス。起こしてくれてありがとう」
「ふふっ、どういたしまして。いつもお疲れ様です、お姉ちゃん」

「そういえばクリスマス。さつきからなにか甘い匂いがあるような気がするんだが」

「あつ、そうだった！ お姉ちゃん、今日は何の日でしょう」

「今日は……」

たしか二月十四日だったな。

「バレンタイン、か？」

「ピンポンピンポーン！ 大正解です。というわけで今日はお姉ちゃんに素敵なプレゼントを用意してまーす」

なにっ。クリスマスが素敵なプレゼント!?

一体なにをくれるのかと心をときめかせた私に聞こえてきたのは。

「クリスマスちゃん。バルクホルンお姉ちゃん起きたー？」

こ、この声は！

「宮藤か!？」

「あつ、おはようございませすバルクホルンお姉ちゃん！」

お姉ちゃん！宮藤が私のことをお姉ちゃんと！

それだけではない！

「み、宮藤。その恰好は？」

「えへへっ。バルクホルンお姉ちゃんがくれた衣装着てみたんですけど。……どうですか？」

私を送った！ デイアンドル衣装を着てくれている！

「も、もちろん似合っているとも。かつ可愛いぞ……宮藤」

「えへへっ、良かったー」

良かったねー、と笑いあう宮藤とクリス。天使がここに二人いる。

「そ、そういうえば結局この甘い匂いは何なんだ？」

「あっ、そうだった。お姉ちゃんこっちこっち」

そうして宮藤とクリスに手を引かれた先にあつたのは。

様々なお菓子とフルーツ。溶かしたチョコレイト。

「じやーん。チョコフォンデュです」

「おおっ。これはすごいな」

「ささ、お姉ちゃん座って座って」

「あ、ああ」

「マシユマロにたーっぷりチョコを絡めてー。はい、バルクホルンお姉ちゃん。あーん」

あーん!? っ、っここは天国なのか……。

「んんっ。うむ。では……あーん」

さあマシユマロカモン！

「お・き・ろ！ バルクホルンっ！」

「げふうっ!?!」

「マシユマロは？ 宮藤は？ クリスは？」

「ずいぶんいい夢を見てみたいだなあ、バルクホルン？」

「シヤ、シャーリーか？」

「ということはさっきまでの宮藤とクリスは夢だったというのか!?!」

「なんとということだ！ なんとということだ！」

「まったく。人の気も知らないで……」

「どうした？ シャーリー」

「なんでもないっ！ ……ほらっ」

「んっ、これは？」

「突きつけるように渡されたのは子洒落た包み。」

「バレンタインだよバレンタイン」

「バレンタイン？」

だんだん思い出してきたぞ。501のみんなでバレンタイン会をやっていて……そのまま疲れて寝てしまったのか。

だが。

「さつきみんなで渡しあつただろう？」

「さつきのは全員で分け合うようだろう？　これは私からの個人的なやつさ。フソウ式ってやつ？」

早口でそれだけ言って、じゃーなど立ち去るシャーリー。

フソウ式。たしか宮藤がいつだったか言っていたような。

フソウでは好きな人に――。

「おつ、おい！　まて！　シャーリー！」

呼び止めると早足になる。なぜだ！

「待てと言っているだろう！」

後姿でも耳が赤くなっているのは見逃してないぞ！

「まーてー！　こらっ、基地内で走るなー！」

f i n